



TITLE:

拡大する地域主義 - 中国という地域世界 -

AUTHOR(S):

濱下, 武志

CITATION:

濱下, 武志. 拡大する地域主義 - 中国という地域世界 -. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1994, 2: 2-7

ISSUE DATE:

1994-07-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187424>

RIGHT:

拡大する地域主義 —中国という地域世界—

濱 下 武 志

「地域性」という問題は、空間的な地域という問題だけではなく、その捉え方に関する方法論や、認識論の領域にも関連するだろう。様々な問題が含まれることから、この問題の取り扱いの手順が重要となる。今回の議論でも、中国は国単位ではなく、他の地域分類と並列して置かれている。中国自体を一つの地域として捉えた方がよい。歴史的な中国像を捉えなおし、現在の中国にどう関わるかという問題も含まれてくる。この前提は、出発点として非常に重要な認識だと感じている。

〈中国の地域性〉

「中国」は国の表現ではないとして、既に様々な問題を持っている。中国の定義もさることながら、「中国」という表現から得られるイメージ、あるいはその拡がりはどこまで想定できるのか。さらに、どのようなアイデンティティの議論にまで進められるのか。総じて、地域としての中国という視点が重要になるだろう。

次に、「地域性」という問題を「地域主義」として捉えてみようと思う。ある地域的な拡がりとしての中国の中で、地域主義が登場している。例えば、華南経済圏という表現がある。あるいは大中華経済圏という、台湾、香港、そして大陸中国を包むような形の地域主義の表現がある。また、現在の開放の動き自体、地域開発戦略という表現で進められている。現在の中国の動きを捉えるためにも、地域主義、あるいは地域性という窓口を通して捉えることが、国家レベルを通して捉えることよりも実質的であり、はるかに重要になってくる。

しかし19世紀以降は、国家を単位とした地域理解や、その関係性の理解が中心であり、権力の所在である北京を中心に中国は捉えられてきた。しかし、現在ではむしろ華南の動向が非常に重要になっている。歴史を遡れば、日本と中国は、琉球、長崎を経由し、華南地域を中心に結びついていた。中国認識のチャンネルを南へと回復できるか、あるいは歴史の連続性を回復できるかどうか、実態分析の問題としても重要となってくるだろう。

〈地域と国家〉

地域性自体が、一つの内的な定義として成立可能だろうかという問題関心から、その両脇にグローバリズムとナショナリズムという二本の柱を立て、それとの相関で地域主義を考えてみたい。グローバリズム、ナショナリズムという問題が、「中国」対「外の世界」あるいは、「中国」と「中の世界」という関係を示すと同時に、中国自体が地域主義、ナショナリズム、グローバリズムを兼ね備え、自ら表現してきたように思う。グローバリズムとしては中華とい

う世界性、ナショナリズムとしては民族という問題が、いかに地域主義によってカバーされているのか、あるいは地域主義を浮かび上がらせるのかという問題に関わってくるだろう。

既に高谷好一さんから、中国は一つのトータルな単位としての存在であるという指摘がされており、その中心性という形で、歴史的には儒教や王朝権力という問題が既に言われている。いちばん広い空間的な地域性を考えた場合、東アジア、北東アジア、中央アジア、それから東南アジアにまで広がるような一つのユニバーサリズムがあり、それは同時に求心力を持っていた。歴史的には「中華」と表現されたり、「華夷秩序」あるいは「朝貢関係」と表現された広域地域としての中国である。

他方、中国の王朝という権力を中心に考えた場合は、中央と地方という関係で形成されていた地域がある。民族の概念もその中に含まれてくるが、省、あるいは県のような小さなレベルの地域、さらに海外の華人、移民によって形成される地域という側面も、中国を考える上で無視できない存在である。中原、あるいは江南の歴史でも、その北へ、南へと移民が行われ、新しい地域性が形成されてきた。そのダイナミズムの延長上に、海外移民の状況を認識しておかねばならないだろう。

孫文は「中華民国」という表現で、中華と国家を並列させた考え方を示した。中華という文化的な優位性、統合性を一つの象徴とし、政治体制やその担い手を並べ、最後に国を置くという考え方から、中国は「中華」と「国家」を合わせながら包もうとしていると言えるだろう。歴史的には一つの国家単位で考えられる傾向が強いが、孫文としては、中華をミニマイズして国に当てはめようとし、一方では民族をマキシマイズして国に当てはめようとしている。現在の「中華人民共和国」という国名も、中華、国家、民族という問題が、最終的に一つにくられた表現になっている。

孫文以前、清末の知識人達には一つのジレンマがあった。中国には一つの国家としての名称がなかったのだ。自らの地域認識を表現する名称がない。あるいは自らの地域の拡がり、国家として重なっているわけでもない。漢や唐というのも王朝の名称にすぎない。そこで便宜的に「中国」という形で妥協するが、この形容自体が一つの形容矛盾でもある。「国の中の国」という意味では、他に対する表現であり、朝貢国によって認知された「中華」と重なってしまう。「国」という概念自体が、華夷という他者との関係によって認識されてきたのだ。

しかし、19世紀以降の西欧諸国との外交においては、主権国家としての「国」が論じられる。そこで歴史的な中華の縮小版と、民族の拡大版として考えられた「中国」が、主権国家の「国家」という形に横すべりしたと見ることができよう。

〈地域のダイナミズム〉

このような空間的な拡がりや名称の関係を考えると、それがどのような歴史的ダイナミズムを示すか、非常に興味のあるところだ。中国の自然的環境を含めた背景を理解し、その上に人の動きをのせ、さらに権力の動きをトレースしようとするならば、地域がどのような歴史的ダイナミズムをみせるかという問題について考えていく必要がある。

中国の地域性のダイナミズムを表現する場合、私は四つの対照的な柱で描写しようと思う。一つは、「中央」対「地方」から示される地域性である。これは、中央と地方の関係全体を地域と考えることもできるし、地方を地域として捉えることもできるだろう。しかし、歴史的には、中央と地方との強弱関係がサイクルを描いて交互に変化すると見ることができる。

例えば王朝の歴史をとってみても、中央に権力が集中する時期と、地方に分権する傾向の強い時期がある。中央と地方の勢力交代のサイクルによって、地域性が構成され、変容するという局面を得ることができる。

第二に、中国における北と南を考えてみたい。歴史的にも防衛上重要だったのは、北の砦と南の海である。北の塞防と南の海防と言ってもいいだろう。北と南の対比によって、中国の王権の性格、地域の性格が存在してきたと思う。南に開き財力を得て、北からの侵攻を防衛することで秩序を保つ。あるいは南を閉じることによって北に対抗するという、南北の相互関係もあっただろう。為政者や、知識人、役人にとっては、南北は同時に視野に入れておくべき問題だった。この側面からも、中国の地域を考えることができるだろう。

第三は、官と民の勢力交代という側面である。これは中央と地方という問題ともオーバーラップするだろう。王朝の盛んな時には官の力が強く、民衆はその下でおとなしくしている。だが、官の力が弱まれば、民の力が強まり、社会の力が噴出してくる。人の移動や行政区分の変動という形で、地域が変容していくことになる。典型的な例は、沿岸地域での倭寇や、清末開港後の商人達の活発な活動である。これも官と民の勢力交代によって強化され、登場してきたと言える。

第四は、中国の「開」と「閉」である。中国はその歴史的変遷の中で、外との関係を開いたり閉じたりしてきた。周辺地域はそれによって非常な影響を被ってきたことになる。開かれた中国の下では、交易関係の繁栄という側面もあろうし、また元の侵攻のような軍事的な膨張主義もあった。中国が閉じた局面においては、周辺地域は独自の地域性を表現する契機となっただろう。中国という地域はその開閉によって、朝鮮、日本、琉球、あるいは東南アジアに至る地域への拡がりを実現したり、あるいは個別的な影響力を作り上げた。

このような四つの側面によって、地域は様々なスポットを当てられ、その自己主張も変容してきた。そういう地域の歴史的展開を考える上で、概念的な地域、あるいは地域アイデンティティというものの単位が問われてくるだろう。例えば、東南アジアの中国人街には、様々な同郷会館が存在する。省レベルはもとより、市レベルの同郷会館もあるし、あるいは出身村という単位での結びつきもある。果たして地域アイデンティティは、どこにいちばん強い求心力を持つのだろうか。これは経験的にいって、おそらく市の単位であろう。省では大きすぎ、村のレベルではつながりが小さすぎる。また、それら相互は必ずしも排他的なものではないし、地域の結びつきによって、人的にもつながろうとする。地域は求心力と同時に、ネットワークとして外に拡がろうとする動機を持つ。

〈地域主義の諸相〉

この点は中国自体のモビリティの高さに依っている。人口移動は非常に広範囲に行われ、権力がそれを追う形となっている。よく中国の版図が議論されることがあるが、これも人の動きが先行し、権力が後からそれを「中華」という統合理念を掲げて正当化していった表れであろう。

地域アイデンティティの問題、特に中国の地域主義に見られる問題には、幾つかのレベルがあると思う。一つは村単位で地域のまとまりを普遍的に表現するものとして、排外主義が挙げられる。受け入れがたい権力を排外的に拒否していくもので、それが国民党であろうと、日本軍であろうと、ましてや共産党であろうと、地域アイデンティティに添わなければ拒否していく。地域排外主義は非常に強い問題だと言えるだろう。

もう一つには、反外国主義というものがある。例えば、反キリスト教運動などで示された一つの地域主義である。これは表裏一体として、その地域のリーダーシップ、あるいは郷紳と言われるローカル・エリートの影響範囲に重なり合うが、その表現としては反外国主義として輪郭が浮かび上がる場合がある。あるいは愛国的な表現による地域主義の表現もあるが、これは一部の知識人の運動に限られているような印象がある。

その意味で、中国の地域を考える場合、地域主義の表れ方の違いから、逆に地域が形成され、形容される側面がある。今までは、中華人民共和国の成立そのものが、反日運動、あるいは抗日愛国運動という形で問題にされ、地域主義はむしろ後ろに退いていた感がある。このような地域主義を全てナショナリズムとして、戦後の中国成立のアイデンティティがあった。その結果、地域主義は、国の存立根拠として、たえず再確認が必要だという課題を提起することになる。地域主義とナショナリズムは、バランスをとることによって維持され、それは繰り返し登

場することになるだろう。

地域主義は地域を自らの視野に入れ、他に対して自己を表現する。それが反権力として表現されたり、反外国、あるいは愛国として表現される。それはどこか一つの所に流れ込むのではなく、たえず並存していることが特徴となっている。これが中国をトータルに考えていく手がかりになるのではないか。決して国境で内と外が截然と分かれているのではなく、中国全体の政治空間に、いくつもの連続した地域の濃淡が描かれていくようなイメージで考えていきたい。

特に歴史的展開からいえば、地方、南、社会、そして開かれた局面から中国を捉え直すことが重要となるだろう。これは、明治以降の日本にとっては、久しく等閑視されていた中国認識と言えるだろう。

コメント

高 谷 好 一

中国に対する意外な方向を与えられたと思う。特に、孫文が華南を中心に中国を捉えたこと、中華をミニマムに、民族をマキシマムにして、国家を考えていこうとしたという話には、中国に対する新たな側面を見せつけられた思いだ。

私はむしろ、北を中心に中国を捉えていた。そして、地域としての中国、「中華世界」として考えている。模式的に言えば、漢人という農民が中心に位置し、その周りに様々な生態・文化的背景を持つ人々がいることになる。北に満州・蒙古の牧畜民、西にはイスラームの商人達、南にチベットの牧畜民、南西中国には濮・越という焼畑民、そして東南アジアの海民がいる。それを漢人が中心に引きつけて、中華世界を形成しているというイメージである。一方では、中国国境がそれとは別に存在している。

このような構図が成立しているのは、やはり中華思想が政治的求心力としてあるからなのだろう。しかし、それで安定しているかというそうでもない。一方では常に離れようとする、あるいは攻め込もうとするものがある。それが、中央と地方、北の塞防、南の海防、あるいは官と民、中国の開と閉という、四つの柱として捉えられたところだろう。

ただし、ここで考えておきたいのは、完結した中国であっても、決して完全に閉ざしているのではないということだ。あらゆるエコロジー、あらゆるカルチュラルなバックグラウンドを持

つ人々を引き付けている状況を保ちながら、閉じたり開いたりしているということだ。これが「中華世界」ではないだろうか。「反外国」、あるいは「愛国心」というように、完全に戸を立て閉じてしまうのは、比較的新しい中国の状況だろう。ここに極めて現代的な、中国の変容が見られる。この地域研究では、むしろそれ以前の中国、「中華世界」から考えていくべきではないだろうか。

濱下さんの中国の議論では、中華思想という中心力に吸い寄せられた「中心社会」が、一つの特徴として挙げられているが、それに「人の動き」というダイナミズムが加えられている。人口移動のモビリティが非常に高く、まさに拡大していく。それを後追いするように、官は中華思想を以て、その空間を正当化していく。「中心社会」、「拡大する地域主義」という二つの視点は、中国という地域を考える時に、非常に重要な要素となるだろう。特に、坪内さんが指摘されたように、地域という具体像ではなく、その中で何が重要な要素となっているかという点に注目した場合、「拡大する中心社会」というフレーズは、念頭に置いておきたい。

質疑応答

土屋健治 「政治空間」という言葉が使われていたが、どのような意味合いで使われているのか、明確にしていきたい。

濱下 高谷さんは近代以降の中国を別に考えた方がいいという趣旨を述べられたが、私としては、あまり区別はないように思う。それ以前でも、オイラートやタタールに対する強い反外国意識があったし、明の時代や、あるいは中華世界の最盛期のようなときにも、反外国意識は表れていた。

ただ、満州国の問題を歴史的にどう捉えるかは、中国史にとっても日本史にとっても、重要になってくると思う。日本史の文脈での議論は非常に多いのだが、むしろ私は、その

地域の持つ歴史から生まれてくる政治的特徴に注目していきたい。例えば、歴史的背景としては東三省という一つの地域があり、清朝でも一つの軍事的な統治になっていた。また、雲南省の大理にも注目している。その地域の権力の消長を考えると、より大きな政治空間を想定してみると、一つの地域全体の政治密度の強弱のような形で権力が生まれてくる。この生まれてこざるをえないような状況、あるいはその競合するバックグラウンドを設定しようという意図があって、「政治空間」という言葉を便宜的に使っている。まだ成熟した言葉ではないので、色々と教えていただければ有り難い。